

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「身体 of 教育論序説」

中澤 雄飛

氏 名 中澤 雄飛
学位の種類 博士（体育科学）
報告番号 甲 第34号
学位授与年月日 平成27年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 身体の教育論序説
論文審査委員 （主査）教授 井上 誠治
（副査）教授 池田 延行
（副査）教授 関根 正美（日本体育大学教授）

学位（博士）請求論文

博士学位請求論文の要旨

「身体の教育論序説」

中澤 雄飛

論文の和文概要

学位申請者氏名	中澤 雄飛
学位論文題目	身体教育論序説
<p>(論文の和文要旨)</p> <p>本研究の目的は、現在の教育課題から身体教育論について検討することである。それは、芸道の文化伝承に着目しつつ、学びのための身体教育について探求する試みでもある。本研究は、1)武道の稽古論、2)身体教養論、3)身体学習論の3つの視点から考察される。</p> <p>第1章「武道の稽古論」では、武道の身体に着目し、その教育論について検討する。まず、武道のわざの中核には「間」「気」という多分に感覚的なものが置かれており、それはひとまとまりの運動として型に自らの身体をはめ込んでいくという方法により獲得される。よって、武道の認識の構造は体験を前提とした身体による学習方法である。文化としての知識や技能の伝達には、学習者のわざの世界への潜入が求められるのであるが、その目的は指導者の視点を取り込み、自ら学習を行う基礎を培うことにある。この学習方法は、学習者の能動的な姿勢を前提とし、指導者は暗黙の教授を通じて学習者の気づきを促すという、指導者と学習者との身体を介した絶え間のないコミュニケーションにより成立する。それは、単なる技術的な問題に止まらず、他者との対話を通じて自己を省み、更なる成長を促す過程でもあり、よって人間形成と関わる教育的営みでもある。</p> <p>第2章「身体教養論」では、他者へと向けられる身体を教養の問題として捉え、その教育の在り方について検討する。自己形成としての教養とは、個人に閉ざされた中で獲得されるのではなく、他者に自己を開き、自己を客観視することで可能となる。すなわち、自己を問いつつも、他者に関わるための自己変容とそこでの自己発見を通して自己は形成されるのであり、よってそれはマナー問題とも通じている。多様な価値観が顕在化する現代社会においては、幅広い視野で物事を考え、統合する力と未知のものに対して主体的に関わることでできる力が、人間の教養として求められている。そこでは、自らの在り方を自省することと社会的活動を通じて他者と連携していくことが重要となる。そして、その行為の基盤となるのは自らの身体、いわば教養としての身体である。作法とは、他者との関わりの中で自己を表現するための規範であり、そして伝統的な礼儀作法は「型」から成り立っている。そこには日本の伝統芸道における稽古の思想に通じ、身体作法としての型を通して身体を規律化し、やがては心をも規律化することを目指す考え方が存在する。そしてそれは、自己を型の中に埋没させるのではなく、むしろ自在な表現を可能とする基礎を培う過程でもある。</p> <p>第3章「身体学習論」では、芸道論の視点から学びとしての身体について考察する。芸道においては、他者の身体という規律から自己の身体を形成していく過程でもある。しかし、芸道における規律化された身体とは、フーコーにみられる権力に従順な身体ではなく、むしろ創造の境地を目指すための基点となる身体である。そしてこの相異は、指導者の具体的な姿を模倣する点にみることができ、人間が新たな生の可能性にひらかれる意味生成の瞬間であるミメシスとしての模倣の概念は、身体への学びを検討する上で重要な手がかりとなる。芸道にみられる身体学習論は、学習者自らが身体を用いて他者に関わることを原点とし、絶えず新たな意味を生成する教育の営みである。さらにそこでは学習者のアブダクションを中心とする探究が行われている。探究は、「ある驚くべき現象の観察」を出発点としており、従って模倣による学びは模倣対象との出会いの問題と深く関わっている。それは、学習者を学びに導くための指導者とのひびき合いであり、その教育は両者に変容をもたらす創造的なアートなのである。</p> <p>身体教育論とは、学習者が能動的に学びを深めることのできる身体を目指すものである。それは、型の習得という身体の規律化を通して自己を変容させると共に、他者に関わる上での基点となる身体を育むものであり、現在の教養とも無関係ではないのである。学習者自らが身体を用いて他者に関わることを原点とし、絶えず新たな意味を生成する教育の営みは、近代の合理的なシステムを超えて、現在の教育問題に対峙する一つの道筋を映し出している。学びとしての身体とその教育の在り方を他者との関係性から改めて問うことが今後の課題となるであろう。</p>	

論文の英文概要

Name	Yuhi Nakazawa
Title	An introduction to the theory of education for the body
<p>(Abstract)</p> <p>The purpose of this study is to consider the theory of education for the body in terms of current educational issues. It is also to quest the education of the body for learning through to focus on handing down culture of arts. This study is considered from three viewpoints of 1) training theory of Budo, 2) cultural theory of the body, and 3) learning theory of the body.</p> <p>In chapter I “training theory of Budo”, the educational theory is considered through to focus on the body of Budo. In the core of techniques, something sensuous like as ‘Ma (temporal distance)’ or ‘Ki (kinetic energy)’ are set. These are acquired through the way of fitting Kata as a mass of movement into one’s own body. Therefore the structure of recognition for Budo is understood by one’s experiencing body. Learner must infiltrate into the world of art for handing down the knowledge and skills as a culture. It is to adopt teacher’s view and to cultivate the basis for learning by oneself. This learning method is come into existence through learner’s active attitude, and teacher develops learner’s awareness through the attitude toward the act itself. Consequently, it is composed by both bodies communicating each other. Training of Kendo as a bodily dialogue is not only technical problems but also the process to reflect on oneself through the dialogue with others and to promote one’s development as an educational enterprise.</p> <p>In chapter II “cultural theory of body”, the body facing into others is grasped as issues of culture. Culture as self-formation is not cultivated in closing oneself, but it is possible to open and to see oneself objectively. Thus, oneself is formed through inquiring oneself, self-transformation related with others and discovering new oneself. It is also related to the issues of manner. Assimilating power that think with wider vision and then participate into the unknown are needed as human culture in modern society with various values actualized. In there, it is important to reflect by oneself and to cooperate with others. The basis of act is one’s body, namely the body as culture. Traditional etiquette consists of Kata. In there, the idea “discipline mind through discipline body” exists and it relates to the idea of training for Japanese traditional arts. Therefore, Kata does not make lose individuality; rather it becomes the basis for one’s free expression.</p> <p>In chapter III “learning theory of the body”, the body as learning is considered in the view of arts (Geido). In the tradition of arts, the process is to make one’s own body from the order of others’. However, the disciplined body in arts is not merely an obedient body toward the power introduced by Foucault but the body as the origin for creating further stage. This difference can be seen in modeling teacher’s specific appearance. The concept of mimesis as a moment in which human open the new possibilities of life and create the meaning is an important clue to discuss learning. Mimesis is the endless endeavor for learning that integrates oneself with the world by one’s own body as a medium; then a new self is created and allowed the further mimesis. In there, concept of inquiry exists that is centered on abduction of learner. Inquiry is started from “observation of an amazing phenomenon”. Therefore, learning by mimesis concerns issues of encounter with model. It is mutual effect with teacher for to guide learner into learn, and this education is creative art that afford transformation to both.</p> <p>The theory of education for the body is considering the body that learner can deepen learning actively. It is self-transformation through disciplined body as learning Kata and cultivates the body as a base to communicate with others. Therefore, it is not unrelated with issues of culture. The educational process that constantly creates the new meaning in the basis of relating to others by one’s own body reflects on the way to face with the current educational issues over so called a modern or rational system. Thus, our future task would be re-ask for the body as learning in terms of relationship with others.</p>	

氏名	中澤 雄飛
学位の種類	博士（体育科学）
報告番号	甲 第34号
学位授与年月日	平成27年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	身体の教育論序説
論文審査委員	（主査）教授 井上 誠治 （副査）教授 池田 延行 （副査）教授 関根 正美（日本体育大学教授）

学位（博士）請求論文

博士学位請求論文の審査結果の要旨

「身体の教育論序説」

中澤 雄飛

国士舘大学

学 長 三 浦 信 行 殿

主任審査員

氏 名 井 上 誠 治 印

論文審査結果の要旨

学 籍 番 号	12-DD001	平成 24 年 4 月 1 日入学
学位申請者氏名	中 澤 雄 飛	
学位論文題目	身体の教育論序説	
論 文 審 査 結 果 の 要 旨	<p>本学位論文「身体の教育論序説」は、1) 武道の稽古論、2) 身体の教養論、3) 身体 の学習論という視点から現在的な教育問題に対峙する身体の教育論について考察 したものである。</p> <p>第 1 章「武道の稽古論」では、身体論の立場から武道の稽古観の文化的異同につい て検討し、稽古に内在する教育思想について考察している。武道のわざの中核には 「間」「気」という多分に感覚的なものが置かれており、それはひとまとまりの運動 として型に自らの身体をはめ込んでいくという方法により獲得され、よって武道の認 識の構造は体験を前提とした身体による学習方法であるとする。また文化としての知 識や技能の伝達には、学習者のわざの世界への潜入が求められるが、その目的は指導 者の視点を取り込み、自ら学習を行う基礎を培うことであり、この学習方法は、学習 者の能動的な姿勢を前提とし、指導者は暗黙の教授を通じて学習者の気づきを促すと いう、指導者と学習者との身体を介した絶え間のないコミュニケーションにより成立 すると説く。そしてそれは、単なる技術的な問題に止まらず、他者との対話を通じて 自己を省み、更なる成長を促す過程でもあり、よって人間形成と関わる教育的営みで あると結論する。</p> <p>第 2 章「身体の教養論」では、他者へと向けられる身体と自己形成の過程を教養問 題として捉え、その教育の在り方について検討している。自己形成としての教養とは、 個人の内に閉ざされて獲得されるのではなく、他者に自己を開き、自己を客観視する ことで可能になるとされ、自己を問いつつも、他者に関わるための自己変容とそここ での自己発見を通して自己は形成されるのであり、それはマナー問題とも通じていると する。また多様な価値観が顕在化する現代社会においては、幅広い視野で物事を考え、 統合する力と未知のものに対して主体的に関わることのできる力が、人間の教養とし て求められているが、その行為の基盤となるのは自らの身体、言わば教養としての身 体であるとする。そして日本の伝統芸道における稽古の思想には、身体作法としての 型を通して身体を規律化し、やがては心をも規律化することを目指す考え方が存在し ており、それは自己を型の中に埋没させることではなく、むしろ自在な表現を可能と</p>	

する基礎を培う過程でもあると結論する。

第3章「身体の学習論」では、芸道論の視点から学びとしての身体とその教育可能性について考察している。芸道の学習は、他者の身体という規律から自己の身体を形成していく過程であるが、芸道における規律化された身体とは、フーコーにみられる権力に従順な身体ではなく、むしろ創造の境地を目指すための基点となる身体であるとする。そしてこの相異は、指導者の具体的な姿を模倣する点にみることができるが、人間が新たな生の可能性に開かれる意味生成の瞬間であるミメシスとしての模倣の概念は、身体への学びを検討する上で重要な手がかりとなるものであり、芸道にみられる身体学習論は、学習者自らが身体を用いて他者と関わることを原点とし、絶えず新たな意味を生成する教育の営みであることを明らかにしている。そして身体教育論とは、学習者が能動的に学びを深めゆく身体を目指すものであり、よって絶えず新たな意味を生成する教育の営みは、近代の合理的なシステムを超えて、現在の教育問題に対峙する一つの道筋を映し出していると本学位論文を結論する。

本学位論文は、武道を含む芸道の学習理論を掘り起こし、身体を基点とする学びのための教育理論として新たに展開したものであり、体育・スポーツ哲学分野はもとより、体育学、教育学の領域における斬新な研究として評価される。身体哲学および教育哲学を中心とする豊富な文献検索と丁寧な文献講読に裏打ちされた本学位論文は、身体の規律化とミメシスとしての模倣の概念を手掛かりとした、新たな学習理論の発想を論理的に解明したオリジナリティー溢れる研究として、今後の確かな発展可能性を窺わせるものである。以上より、本学位論文を当該分野の学術的発展に寄与する価値ある研究成果として高く評価するものである。